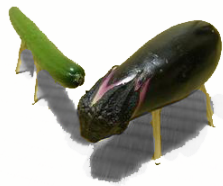


トートーメーに 霊はやどるか？



果たして、どれだけほんとうに 尊敬の念をもって崇拝しているのでしょうか？



沖縄には伝統的な横穴式墳墓である亀甲墓かめこうぼかというのがあります。先の大戦中、多くの沖縄の人々は空襲の時、それぞれの祖先の骨を収めて

ある亀甲墓かめこうぼかに避難したそうです。それは単に亀甲墓が壕として役立つとか、安全であるとかいう物理的な理由からだけでなく、祖先の霊が見守って下さると信じていたからでした。昔から祖先の霊は不滅で永遠に長らえると信じていました。ですから避難中には身軽になるため途中他の荷物を捨てても、位牌だけは手放さなかったといわれています。



では何故、沖縄の人々にとって位牌がそれほど大事で、崇拝の対象となっているのでしょうか。それはいうまでもなく、祖先の靈魂が位牌に宿っていると信じているからです。このようにして祖先を供養するこ

とを祖先崇拝といいますが、果たして、どれだけほんとうに尊敬の念をもって崇拝しているのでしょうか。沖縄のたいていの人々は祖先のたたりを恐れて供養しているのではないのでしょうか。もしそのような祖先崇拝であるならば、それは沖縄の美風でもなければ、誇りとすべき文化遺産でもないはずですよ。

沖縄の祖先崇拝は田地奉行という政府の上役から強制的にさせられたものであることがわかります。



照屋寛範著「沖縄の宗教・土俗」によると沖縄で初めて位牌が祭られたのは、今から

五百年ほど前の尚真王の時代であるといわれています。そして一般庶民に祭られるようになったのは旧藩時代の末期の頃で、今から約百五十年ほど前からのことです。その当時の、田地奉行であったたまよせさとぬしトートーメー玉代勢里之子が位牌検査を始めました。位牌を祭っているか、否か、を検査したのです。ところがまだ作っていない家では隣から借りて検査をすませたといえます。垣根ごしに一つの位牌を次から次へと手渡しをして、三、四軒をすませたといえます。これから考えてみますと、位牌を中心とする沖縄の祖先崇拝は、田地奉行という政府の上役から強制的にさせられたものであることがわかります。

今から百年ほど前の「わらべ歌」に、



「一貫トートーメーいっかん トートーメー盗人ぬすにけえとらち、
母さんアンマようちゃーひちくわちすがや一七月、
食外くえはんち」

というのがありますが、この童話は昔の沖縄の習俗をよく現していると思います。

このように位牌トートーメーがわずか百五十年ほどの間に一般に広く深く浸透していったのを考えると驚かざるを得ません。沖縄の人々は祖先の靈魂が位牌に宿っていると信じているのですが、果たして、本当でしょうか。

聖書の教えと死の真相



死者は何事も知らない

人間の死と死後の状態について、聖書は明確に次のように教えています。まず死は眠りであるといわれています。即ち無感覚な状態なのです。

「生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさへも、ついに忘れられる。その愛も、憎しみも、ねたみも、すで



に消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久に関わることがない」（伝道の書 9章 5,6 節）とあります。

**本当の親孝行は、親が
生きている間にしか出
来ない。**



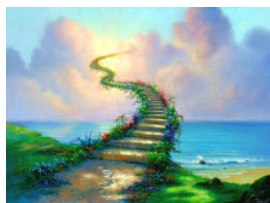
沖縄の人々が聖書の教え通

り、死者は無意識の状態にあり、何ごとも知らない、何ごとも出来ない、眠りつづけているという真理を信じるならば祖先崇拜の在り方も変わってきます。たたりを恐れたり、またユタから「御願不足^{うがんぶすく}」と脅かされても不安になることもないでしょう。たとえ何かの不幸や心配ごとが起こってもユタに助けを求めることもないと思います。また「線香^{うこう}どうこう^{うこう}」つまり先祖に線香をあげることが孝行という思想も変わり、本当

の親孝行は親が生きている間にしか出来ない、死んでからでは遅いんだということがわかってくるはずで



**キリストによって備えら
れた永遠の家郷があるの
です。**



イエス・キリストは「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」（ヨハネ11章の25節）と言われました。キリストは十字架で死んで人間の罪をあがない、人間が死を克

服する道を開いて下さいました。罪をあがなわれた人々はキリストが再びおいでになる時によみがえり、キリストのもとに天国へうつされるのです。キリストは自ら死からよみがえり、その保証となって下さったのです。これはキリストを信じるものの不動の希望です。沖縄の人々が信じているように墳墓は決して死んでいく人の永遠の住居ではないのです。人間が最も恐れる死の彼方にはキリストによって備えられた永遠の家郷があるのです。あなたも救い主キリストをお信じになられて、この輝かしい希望に生きてくださるように心から祈るものです。



有名な作家、高見順さんは、晩年にキリストを信じていましたが、その臨終に最後の言葉として「死に直面してはじめてキリスト教の有り難さがわかった」と言いました。人の一生の価値はその人の働き盛りとか、人気絶頂のときに決定されるのではない。それは実に、その人の臨終の枕元においてなされるのである。

「よく過ごした一日が、幸せな眠りをもたらすように、よく過ごした一生は幸せな死をもたらす」（聖書の言葉）

新垣三郎・牧師



**先祖（死者）の霊は
た
崇るか？**

トトメーに霊はやどるか？

